

脳性麻痺をはじめとする障害児の療育に関わる医療機関は、従前の肢体不自由児施設中心の体制から、地域の一般病院や保健福祉施設などに移行しており、このため理学療法(士)には、ICF の概念を踏まえ、児の成育を見通しながら地域に根差した多面的なアプローチを行うことが求められている。本特集では一般病院、肢体不自由児施設、地域療育施設における児の理学療法の取り組みや課題、地域連携のあり方、さらに特別支援教育や地域生活支援について解説していただいた。

■地域生活支援を目的とした小児理学療法（米津 亮、他論文）

ICF の導入により、理学療法の実施にあたっては、地域生活を支援する観点を積極的に取り入れる必要がある。本稿では、障害児・者の運動発達と環境を多角的に捉え、対象児・者とその家族の地域生活を支援する理学療法のあり方について論じる。そのうえで、支援内容について現状とその課題点についてまとめ、今後の理学療法士の果たすべき役割について私見を述べる。

■一般病院における小児の理学療法（藤本智久、他論文）

近年、脳性麻痺などの小児の理学療法において、NICU からの早期理学療法的重要性に対する認識が高まり、その取り組みも増えてきている。しかし、一般病院では、長期のフォローが困難であることも多く、地域への連携が重要である。本稿では、当院における NICU からの早期理学療法システムおよび一般病院としての急性期の小児理学療法の取り組みについて述べる。

■肢体不自由児施設における小児の理学療法—当園におけるリハビリテーションの現状と今後の課題（中嶋信太郎論文）

当園のリハビリテーションの特徴は、①ボイタ法を中心とした治療体系、②児者一貫したライフステージに沿った療育システム、③総合病院の附属施設として高度な医療が提供できるという3点である。全体的な利用者の動向は、全国の肢体不自由児施設と同様に、高齢化・重症化傾向にあるが、療育における最終的な目標である、それぞれの利用者に応じた自立目標の達成に向けて、地域のセンターの役割を果たして行きたいと考えている。

■地域療育施設における小児の理学療法—当園における相談から通園、その後の関わり（本澤由美子、他論文）

障害福祉制度の変化とともに地域療育への取り組みが多彩となり、さらにその療育の質的な内容を問われる時代となってきた。また、よりよい療育を進めるうえでは、療育体制の強化と同時に、利用者とその家族からの療育への理解と協力も必要である。当園では地域における相談事業から専門療育事業へと一体的な支援を実施している。本稿では、当園の支援の流れや保護者を含めた具体的な関わりを紹介し、地域療育における課題を提示する。

■特別支援教育における理学療法士の役割—子どもたちの学校生活を支える（多田智美論文）

2007 年 4 月より特別支援教育が実施され、医療と教育の連携が求められているにもかかわらず、セラピストと教員の距離はなかなか縮まらない。教育という「異なる文化」に踏み込むのではなく、理解し、チームパートナーとして学校生活に即した支援を行うことで、医療と教育の連携は生まれるのではないだろうか。特別支援教育への支援・連携のあり方について、病院セラピストを経てスクールセラピストとなった筆者の経験から私見も交えて提案したい。

とびらページの書道作品について

「深山幽谷（しんざんゆうこく）」

解説：どこまでも続く深い山や谷。たまには自然の中でゆっくり遊んでみたい、多忙な現代人のわれわれも、大自然の中で自分をしっかり見つめ直してみてもいいのではなかろうか。